



JSPS Stockholm News Letter 2014 Winter

Prologue

01

北欧の国 スtockホルムより

News

02

フィンランド シンポジウム・同窓会総会開催
2013年度第2回KVAセミナー開催
デンマーク Students Information Exchange・JSPS Meeting開催
Student Fair参加 / 大使館新年祝賀会参加
ミーティング記録

Reports

05

KVAセミナー / 東北大学リエゾンオフィス開所一周年行事
フィンランド環境科学合同シンポジウム2013
デンマーク Students Information Exchange 開催レポート
同窓会新メンバー紹介 / KI学長・日本国大使昼食会
ストックホルム「世界一長い美術館」

Academic Information

11

2013年ノーベルウィーク / 東大十倉教授名誉博士号授与式
lund大入学希望者について / EuroScience Open Forum開催
リサーチカウンシル2014年助成金発表 / 北大シンポジウム
フィンランド・エストニアクラウドシステム構築
カロリンスカ医科大学ニュース

Notice

14

Gathering for returnees from Japan開催 (Finland)
セミナー・シンポジウムの開催
外国人特別研究員事業(欧米短期 & 一般)
カロリンスカ医科大学同窓会会員募集
JSPS Stockholm News Letter 定期購読

北欧の国 ストックホルムより ストックホルム便り

JSPSストックホルム研究連絡センター長 宮澤健夫

ストックホルムと東京との生活の違いは何かを興味深く観察しました。まず感じることは、ストックホルムの街はとても美しく清潔感があることです。私はアパートからオフィスまで歩いて通っているのですが、歩道は広くて自転車道路が整備されており、人々は背筋をまっすぐに胸を張って歩いています。歩く速度も速く、どんどん追い越されてしまいますが、スウェーデン人は背が高く足も長いので仕方ありません。また、福祉を充実させている国家だからでしょうか、街の風景の中では貧富の差をあまり感じません。経済の実態はよくわかりませんが少なくとも街の風景からは、一部のEU圏の国で見られるような疲弊感を感じられず、人々の生活に豊かさが感じられます。この国は税金が高いことで有名ですが、福祉と経済を見事に両立させているようで、日本も見習うべき点が大いにあるのではないのでしょうか。

ストックホルムの人たちの国民性は日本人によく似ている感じがします。どの場面でもゆずりあいが見られ、少し控えめで、正義感が強く、底抜けに明るくはないが奥の深い人間性を感じます。私が抱いていたバイキングの荒々しい凶暴なイメージとは全く違いました。また、女性の社会進出が日本とは比べものになりません。色々な機関や役所を訪問すると管理職の半分は女性ですし、街の色々な場面で男女同権を感じさせられます。それだけ女性の意識が高いという事でしょうか。スウェーデンでは小さい頃から英語教育が徹底していますのでほとんどの人が英語を流暢にしゃべります。ある言語学者に聞いたら、スウェーデン人の英語が一番美しいとも言っていました。街の中でもほとんどの場所で英語が通じますから生活に困ることは少ないようです。

12月に入っても今年は暖かくて5度前後の日が多く、雪が降ったのは数日で、更に積もったのは1日だけでした。冬の寒さは1月から2月が本番でしょうか。11月末からクリスマスシーズンに入り、街はイルミネーションで飾られ何となく気分がうきうきして来るのですが、12月のストックホルムは何といってもノーベルウィークです。12月10日のノーベル賞授賞式に向けて数々のイベントが開催されます。その中で、12月7日に開催されたノーベル医学生理学賞の受賞講演を聞きました。今年は細胞内輸送のメカニズム解明に関する功績で、ジェームス・ロスマン博士、ランディ・シェクマン博士及びトマス・ズートホフ博士の3名が講演を行いました。講演は午後1時からKarolinska InstitutetのAula Mediaという鏡で外装された新築のモダンな建物で行われ、一般の人でもだれでも参加できる講演会でした。会場に入ると案内係りはみな民族衣装を着て華やかな雰囲気に満ちていました。会場は1,000名以上と思われる聴衆で埋め尽くされ、若い研究者や学生の姿が目につき、皆さん熱心に講演に聞き入っていました。もちろん、受賞者のお弟子さんや共同研究者も多数出席されており、発表内容を担当された研究者達とその都度講演者から聴衆に紹介されるなど、会場全体と講演者とが一体となったすばらしい講演でした。私がここで感じたのは、ストックホルムの人々、特に若い研究者や学生は幸せだという事です。ノーベル賞という世界最高の賞が市民生活の中に日常の事として根付いているからです。ノーベル賞の存在がスウェーデンという国のイノベーション力を推進し、国民のメンタリティーを高めていると思います。日本の多くの若い研究者にはどんどんスウェーデンに来てもらい、アカデミックな雰囲気に満ちた環境で研究してほしいと思います。



北海道大学・ヘルシンキ大学 "Joint Symposium" の開催

11月27日-28日に、北海道大学、ヘルシンキ大学、ストックホルムセンターが共催するシンポジウム「Joint Symposium on Environmental Science 2013ー Bridging Finland and Japanー」がヘルシンキ大学にて開催され、北海道大学から上田一郎副学長やコーディネーターの森川正章教授をはじめとした多数の教員や若手研究者ら約20名が参加した。

シンポジウムでは、ヘルシンキ大学 Heljä-Sisko Helmisaari教授と北海道大学 小池孝良教授によるフィンランドと日本の環境保全をテーマにした基調講演や複数のオーラルセッション、ポスターセッションが行われた。両大学研究者による非常に興味深い沢山の講演が行われ、会場には60名を超える研究者・学生が集まった。

1日目の夜にはレセプションが開かれ、両大学の研究者が親睦を深めた。JSPSのプログラムによって両国への派遣・受入を検討している研究者もおり、ストックホルムセンターからもプログラム詳細の説明などを行った。

森川教授は2012年に在スウェーデン日本国大使館とストックホルムセンターが行った外務省「科学技術外交推進専門家交流事業」を契機に北欧諸国での共同研究を開始させ、その後北海道大学ヘルシンキオフィスの尽力により今回のような大学規模のシンポジウム開催へと発展したものである。ストックホルムセンターも引き続き両大学の連携強化に向けて支援したい。



フィンランド同窓会2013年総会の開催

11月27日に、ヘルシンキ大学にてフィンランド同窓会総会が開催された。総会では、今年度の活動報告、新規会員の承認、役員の交代、名誉会員の選出、来年度の活動について、活発な話し合いが行われた。

この度新たに9名の新規会員が承認され、同窓会員は全体で74名となった。

また今回よりヘルシンキ大学 Kristiina Jokinen博士がChairmanに、アアルト大学 Markus Valkeapää博士がVice-chairmanに就任した。ストックホルムセンターより、両役員に対し、引き続き同窓会の活発な活動にご尽力いただきたい、更なるセンターとの連携強化をお願いしたい、というメッセージを送った。

総会は北海道大学-ヘルシンキ大学の上記シンポジウムと同日に行われ、同窓会員はレセプションに合流し、会員同士だけでなく、北海道大学やヘルシンキ大学の研究者などシンポジウム参加者たちとも交流を深めた。



2013年第2回KVAセミナーの開催

1月9日-1月13日に、東北大学大学院薬学研究科 倉田祥一郎教授を招いた2013年度第2回KVAセミナーがウプサラ大学、ウメオ大学、ストックホルム大学にて開催された。

セミナーでは「抗体を持たない昆虫がいかに感染を防御できるのか」という昆虫免疫研究について講演が行われた。

それぞれのセミナーには50名から70名程度の学生や研究者が集まり、講義終了後も様々な質問が寄せられるなど、盛況のうちに終了した。



Japan-Denmark Students Information Exchange ・ JSPS Meetingの開催

11月14日に、在デンマーク日本国大使館内で、同大使館、東海大学同窓会デンマーク支部会、ストックホルムセンターの共催で「Japan-Denmark Students Information Exchange」が開催され、共催団体の同窓生などが集まった。

この会合は当センターのデンマークにおける初の活動であり、元JSPSデンマークフェロー11名が集まった。会に先立ち、「JSPS Meeting」を開催し、今後のデンマークでの活動について意見交換を行った。元フェローからはこのネットワークを継続させたい、沢山のデンマークの学生に日本で学んで欲しい、ストックホルムセンターのデンマークでの活動を積極的に支援する、定期的に会合を開催しよう、といった積極的な意見が述べられた。

後日、2014年の活動について参加者と相談・検討し、9月にコペンハーゲン大学にてJSPSプログラムや日本での研究を紹介するセミナーを開催することが決定した。

今後も元フェローと協力し、「デンマーク同窓会設立」に向け、様々な活動を実施していきたい。



ストックホルム大学 Student Fair への参加

11月19日に、ストックホルム大学にて海外提携大学や各国大使館などがブースを設置し学生へ留学情報などを発信する「Student Fair」が開催され、ストックホルムセンターも在スウェーデン日本国大使館と共に日本代表として参加した。

今回のイベントは11月18日から22日までストックホルム大学にて留学情報を提供する目的で開催された「International Week」の一環である。

当日はおおよそ70ブースが並び、学部生を中心に多くの学生が訪れた。当センターもJSPSフェローシッププログラムや日本での留学について積極的に紹介した。



大使館新年祝賀会への参加

1月22日に、在スウェーデン日本国大使公邸において新年祝賀会が開催され、ストックホルムセンター職員も出席した。

祝賀会では在スウェーデン日本国大使館 森元誠二特命全権大使より、飛躍ある一年になるようにとの願いをこめた新年の挨拶や、自身の着任後初めての年越であり新たな一年への抱負、今後の大使館の活動についてのお話があった。

会には長年スウェーデンに在住している日本人や日本企業の関係者、日本と関係の深いスウェーデン人が数多く集まり、餅つきの催しとともに和食や日本酒がふるまわれ、和やかな雰囲気の中懇親が深められた。



ミーティング記録

ストックホルムセンターでは、スウェーデンにお越しの日本人研究者や大学関係者の方々と現地での意見交換会や北欧諸国で活躍されている研究者の皆様との情報交換等を積極的に行っています。

2013年秋～冬にかけて沢山の方々のご訪問やランチミーティングがありました。

以下2013年11月から2014年2月にかけてのその一覧です。

北欧諸国でのご活動については是非ご紹介、ご相談させていただきたいと思いますので、お気軽にご連絡ください。

NOVEMBER

- 13日 元JSPSデンマークフェロー Aalborg University The Faculty of Social Sciences Rasmus Gjedssø Bertelsen博士来会
- 21日 北海道大学ヘルシンキオフィス Tero Salomaa副所長来会
- 25日 北海道大学国際本部 川野辺創副本部長来会
- 29日 東京女子医科大学先端生命医科学研究所 江上美芽客員教授らとのミーティング



DECEMBER

- 10日 日本学術振興会東京本部出張者ノーベル博物館視察・センター来会
- 11日 Uppsala University Faculty of Arts 中嶋正之教授・東京工業大学社会理工学研究科 池上雅子教授らとのミーティング
- 18日 聖心女子大学文学部 澤野由紀子教授来会



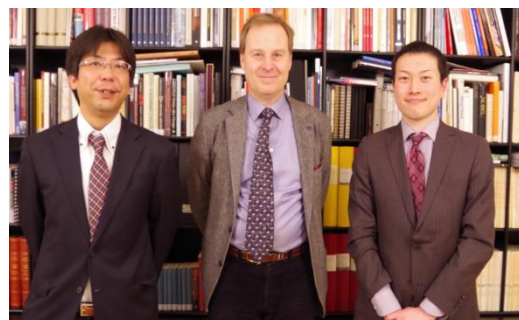
JANUARY

- 13日 東海大学 川崎一彦名誉教授・University of Gothenburg The Faculty of Arts トゥンマン武井典子名誉教授・JETRO London 三瓶恵子氏来会
- 21日 岩手大学研究交流部 石沢友紀主査来会
- 23日 東京大学大学院医学系研究科 宮園 浩平研究科長との在スウェーデン日本国大使公邸での昼食会
- 29日 大阪大学未来戦略機構 宮坂昌之特任教授・同大学院医学系研究科 竹田潔教授・馬場幸子助教来会



FEBRUARY

- 4日 慶応義塾大学医学部 安井正人教授来会
- 5日 東京大学 北森武彦副学長との在スウェーデン日本国大使公邸での昼食会
- 11日 山梨大学医学部 宮澤恵二教授・愛媛大学大学院医学系研究科 今村健志教授来会
- 19日 東京女子医科大学先端生命医科学研究所 江上美芽客員教授との打ち合わせ・在スウェーデン日本国大使館訪問
- 20日 東北大学とノーベル博物館との打ち合わせ
- 21日 東北大学とのランチミーティング



KVA-JSPS セミナー

東北大学大学院薬学研究科 倉田祥一郎

ストックホルム大学のYlva Engström教授のご推薦により、KVA-JSPSセミナー講演を、1月9日(木)にウプサラ大学で、1月10日(金)にウメオ大学で、そして1月13日(月)にはストックホルム大学でさせて頂く機会を得ました。さらに、1月14日(火)にはKVA-JSPSセミナーの機会を利用して、フィンランドのタンペレ大学でも講演させて頂く機会がありました。大変名誉なことであり、心から感謝しております。

私は自然免疫の制御機構について研究をしています。自然免疫は、抗体産生による、いわゆるワクチン効果で皆さんになじみのある獲得免疫とは異なる感染防御機構です。獲得免疫では、感染してから抗体が産生されるまでに時間がかかります。その間、私たちはどのようにして感染から身を守っているのでしょうか？また、獲得免疫を有している生物は脊椎動物のみで、全動物種の4%に過ぎません。獲得免疫を持たない生物は、どのようにして感染から身を守っているのでしょうか？この二つの重要な問いに対する答えが自然免疫です。自然免疫は、全ての多細胞生物が生まれながら有する、感染に素早く対応できる感染防御機構です。

この自然免疫研究の発展に昆虫免疫の研究から大きな貢献を果たしたのが、スウェーデンの細菌学者故ハンス・ボーマン教授（ウメオ大学、ストックホルム大学）と共同研究者です。彼らは、1972年に昆虫は感染に応じて殺菌活性を誘導することを初めて報告し、1980年にはその実態である抗菌ペプチドを同定しました。私たちは、モデル生物であるショウジョウバエを用いて、感染した病原体を認識し、抗菌ペプチドを産生する機構を研究しています。したがって、故ボーマン教授ゆかりの地で今回講演できましたことは大変名誉なことです。また、故ボーマン教授の直弟子であるHåkan Steiner教授、Ingrid Faye教授、Dan Hultmark教授に再会し、旧交を温めることができ嬉しく思いました。Faye教授からは、図らずも1972年の論文の別刷りを頂きました。ちなみに、昆虫の抗菌

ペプチド産生機構と、哺乳動物の自然免疫制御機構には類似性が見られ、この研究領域に大きな貢献を果たした3人の研究者に2011年ノーベル生理学・医学賞が授与されています。

新年明け早々の1月8日(水)にストックホルム空港に降り立ったときの気温は2, 3度で、住んでいる仙台市とほぼ変わりませんでした。ところが、週末には例年通りの寒波が訪れて、最終的にフィンランドのタンペレでは、マイナス23度の歓迎を受けることになりました。これも良い思い出です。ウプサラ大学では、Kenneth Söderhäll教授がホストを務めて下さいました。講演の後では、関連する無脊椎動物の免疫学の研究者達と個別に討論すると共に、ウプサラ大学ならではのザリガニなどの動物飼育施設の見学を行いました。ウメオ大学では、Hultmark教授がホストを務めて下さいました。講演後に行った微生物学研究者や、抗ウイルス機構を研究する研究者とは討論が弾み、共同研究を行うことになりました。ストックホルム大学では、Engström教授がホストを務めて下さいました。講演とは別に、同じ研究領域の若手研究者と大学院生が参加するワークショップが企画されており、大学院生の在り方や研究上の基本的な問題から実験上の細かいところまで議論することができ、若い力と熱気を感じることができました。これらのKVA-JSPSセミナーでは、フィンランドのタンペレ大学での講演も含めて、のべ200名以上の参加者があり、50名ほどの関連研究者と個別に話し合う機会に恵まれました。活発な討論ができ、スウェーデンと日本の両国の学術交流が更に発展する契機となったと思います。

最後に、ご推薦とご歓待頂きましたEngström教授、Hultmark教授、Söderhäll教授、および、滞在中お世話になりましたJSPSストックホルム研究連絡センター宮澤健夫先生と二上佐和江さんに感謝申し上げます。



エネルギー、航空宇宙および材料加工プロセスにおける流動ダイナミクスに関する国際ワークショップ及び東北大学のKTHリエゾンオフィス開所1周年行事の開催

東北大学流体科学研究所

東北大学では流体科学研究所および工学研究科が中心となり、リエゾンオフィスをスウェーデン王立科学大学(KTH)に平成24年6月28日に再開設しました。約1年を経て、交流が発展している進捗状況を共有するために、平成25年9月10日、11日にJSPSストックホルムセンター、KTH、東北大学が共催する東北大学リエゾンオフィス開所1周年記念ワークショップである“International Workshop on Flow Dynamics related to Energy, Aerospace and Material Processing”（エネルギー、航空宇宙および材料加工プロセスにおける流動ダイナミクスに関する国際ワークショップ）を開催しました。さらに、リエゾンオフィス開設1周年の記念式典をKTHにおいて開催しました。東北大学からは里見 進総長をはじめ、植木俊哉理事、伊藤貞嘉理事、山本雅之東北メディカル・バンク機構長、流体科学研究所および工学研究科教員ら21名、KTHからはPeter Gudmundson学長、Gustav Amberg副学長、Ramon A Wyss副学長および機械工学科教員の23名、さらには、両大学と強い交流のあるフランスのリヨン大学からは、Ecole Centrale de Lyon(ECL)のPhilippe Kapsa教授、INSA-LyonのJean-Yves Cavallé教授の参加がありました。2日間にわたり、各大学・研究機関における最先端研究成果の発表および議論が活発に行われました。10日の午前には、ワークショップに先立ち、KTHのHenrik Alfredsson教授および流体科学研究所の高木教授の司会のもとで開会式が持たれ、KTHのPeter Gudmundson学長、藤井義明JSPSストックホルムセンター長および東北大学の里見 進総長より祝辞を頂戴しました。その後、Gustav Amberg副学長、伊藤貞嘉理事およびPhilippe Kapsa教授より、KTH、東北大学およびリヨン大学の紹介があり、シンポジウムの盛大な幕開けとなりました。

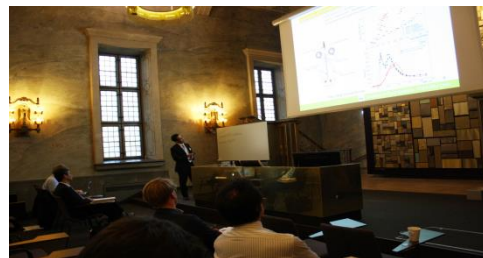
プレナリーレクチャーでは、KTHのHenrik Alfredsson教授が回転ディスク表面上における回旋流に関して講演しました。このような流れは、ハードディスク上の流れ解析の基礎となるものであり、最先端の科学技術の解明に、長い歴史を持つ流体力学の重要性がますます高まっている状況を説明しました。

東北大学流体科学研究所の早瀬敏幸所長は、計測と計算を一体化した次世代融合研究手法により、新しい流体科学を創造できることを講演しました。このような技術は、例えば、生体内の刻々変化する血流の高精度超高速計算を実現し高度医療の実現に貢献することができます。

さらに、工学研究科の浅井圭介教授や金属材料研究所の後藤孝教授を始め、若手研究者を中心とした共同研究の紹介などを中心に23の研究発表がなされ、KTHとの共同研究が着実に進んでいることを示しました。また、Philippe Kapsa教授、Jean-Yves Cavallé教授からも研究発表がありました。

平成25年10月1日にはRamon A Wyss副学長、Fredrik Lundell 准教授を始め6名が東北大を訪問し、KTHの東北大学リエゾンオフィス開設セレモニーを行いました。そこでの打ち合わせにより来年度のワークショップは、2014年10月に仙台で開催される流体科学研究所主催の第11回 International Conference on Flow Dynamics(流動ダイナミクス国際会議)と同時開催することになりました。

本ワークショップは多大な成果をあげ、KTHと東北大学のさらなる協力発展に繋がるものとなりました。ここに、JSPSをはじめ、関係各位に厚く御礼申し上げます。



Joint Symposium on Environmental Science 2013 — Bridging Finland and Japan — 環境科学合同シンポジウム2013～フィンランドと日本の架け橋～

北海道大学 森川正章

去る2013年11月27日、28日の二日間にわたり、題記シンポジウムがヘルシンキ大学ヴィーキキャンパス（市街より車で約30分）にて開催されました。まず開会の辞にあたり、篠田研次在フィンランド日本国特命全権大使、宮澤健夫JSPSストックホルム研究連絡センター所長、上田一郎北海道大学副学長、シピ・マルケッタヘルシンキ大学農学森林学部長よりご挨拶を頂きました。特に、篠田全権大使の扇子を使ったスピーチは印象的で、今回の企画がその一本の中骨となることが期待されます。本シンポジウムは世界第一位と第三位の森林大国である「フィンランドと日本をむすぶ環境科学」をキーワードとしてJSPSストックホルムセンターと北海道大学が企画したもので、第一部会：バイオテクノロジー、第二部会：森林管理と生態系サービス向上、第三部会：寒冷地の環境問題、から構成され、合計24題の講演と24+2題のポスター発表が行なわれました。2日間の延べ参加者は約100名で連日熱心な議論が交わされました。一部のグループはシンポジウム終了後も夕刻遅くまで研究室で歓待され、帰りは担当教授の車でホテルまで送迎してもらったそうです。

また、20世紀のフィンランドを代表する建築家アルヴァ・アールトが設計およびデザインした斬新なヘルシンキエネルギービル8階のレストラン”Puro”で催された晩餐会ではJSPSフィンランド同窓会メンバーも交え、ときが経つのも忘れて歓談しました。余談ですが、今回シンポジウム講演要旨が期限までに収集できず印刷出来が出発直前となり、100冊を手分けして札幌から持参した甲斐がありました。このシンポジウムを期に渡日に興味をもつヘルシンキ大学の学生やスタッフもあり、JSPS外国人特別研究員制度に関心を示していました。北海道大学ヘルシンキオフィスなども介して両国の交流が今後も継続することを切に祈っています。



Japan-Denmark Students Information Exchange開催レポート



11月14日、在デンマーク日本国大使館、東海大学同窓会デンマーク支部会、ストックホルムセンターの共催のもと、3機関の同窓生を集めた交流会が開催され、50名を超える同窓生達が集まった。本会合は当センターのデンマークにおける初めての活動であり、同時に日本の学術関係機関がこのような催しを行う事も初めての試みであった。

在デンマーク日本国大使館 末井誠史特命全権大使からのOpening remark、東海大学同窓会デンマーク支部会とストックホルムセンターからの参加者へのWelcome remarkの後、大使館 篠田欣二次席から「Japanese Security Policy」についてのレクチャーを行った。

その後は懇親会が行われ、自己紹介や日本の思い出話など、参加者同士の交流が深められた。

2014年以降も同様の会合を開催する予定で、その「呼称」を募集し、「Japan Alumni Assembly」に決定した。

共催3機関からの挨拶

開会に当たり、それぞれの機関からOpening remark、参加者へのWelcome remarkが行われた。

3機関での共催は今回が初となることから、それぞれの機関から今後の更なる協力体制の強化と、活動の発展を願う言葉が贈られた。

篠田欣二次席によるLecture

在デンマーク日本国大使館 篠田欣二次席による「日本の安全保障政策」についての講演では、日本が抱えている領土問題、憲法改定問題、そしてその歴史的背景などについて話された。聴講者からは「聞いていて大変興味深く、新しい視点を得た気がする」との感想が寄せられた。

【イベントは期待通りであったか】

はい 17名
いいえ 0名
特段の期待をもっていなかった 4名

アンケート 結果

【イベントをどのような間隔で実施すべきか】

年に2回 6名
年に1回 14名
2年に1回 1名
3年に1回もしくはそれ以下 0名

【コメント】

- ・年2回以上の開催でもよいと思う
- ・開催目的をより明確に伝えて欲しい
- ・日本文化についての講演があってもよい
- ・別の同窓会組織とネットワーク構築はとてよい
- ・より学術交流的側面があるとよい
- ・参加者リストを提供して欲しい

など



フィンランド同窓会 新Chairman・Vice-chairman・ボードメンバー紹介

11月27日に開催されたヘルシンキ大学でのフィンランド同窓会総会にて、新たにUniversity of Helsinki Kristiina Jokinen博士がChairmanに、Aalto University Markus Valkeapää博士がVice-chairmanに、Aalto University Michael Gasik博士とUniversity of Helsinki 伊藤早苗氏が新しくボードメンバーとなりました。以下、4人の経歴を紹介いたします。



Kristiina Jokinen博士

1994年 PhD取得
(University of Manchester Institute of Science and Technology)

1994-1996年
JSPS Research Fellow
(奈良先端科学技術大学院大学)

1997-1999年
Invited Researcher
(国際電気通信基礎技術研究所)

1999-2001年
Senior Research Manager (FLV Services)

2001-2004年
Project Director
(University of Art and Design)

2004-現在
Adjunct Professor
(University of Helsinki)



Markus Valkeapää博士

2004年 PhD取得
(Göteborg University)

2004-2006年
JSPS Research Fellow (東京工業大学)

2006-2008年
Researcher
(Helsinki University of Technology)

2009-2010年
Teaching Researcher
(Aalto University)

2010-現在
Lecturer
(Aalto University)



Michael Gasik博士

1987年 PhD取得
(Moscow Institute of Steel and Alloys)

1983-1991年
Research Engineer,
Senior Research Scientist, Assistant Professor
(Dnipropetrovsk Metallurgical Institute)

1991-2010年
Researcher, Docent, Professor (Helsinki University or Technology)

1998年
Visiting Professor
(東北大学)

2010-現在
Professor
(Aalto University)



伊藤早苗氏

2003年 BA取得 (慶應大学)

2005年 MA取得 (筑波大学)

2005-2007年
PhD Student
(筑波大学)

2007-2009年
Visiting Student
(University of Helsinki)

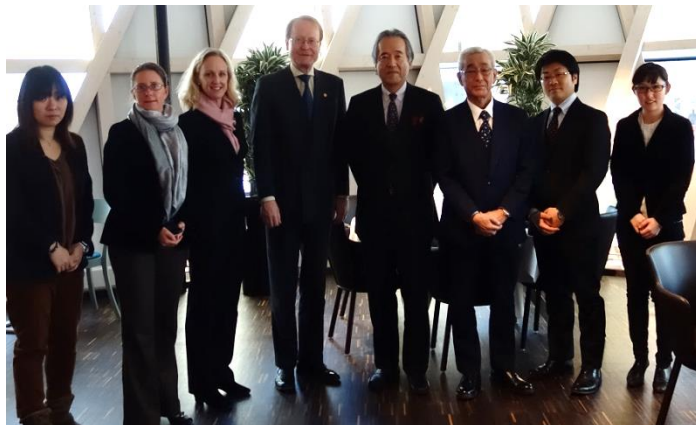
2009-現在
PhD Student
(University of Helsinki)

カロリンスカ医科大学 Anders Hamsten学長と 在スウェーデン日本国大使館 森元誠二特命全権大使との昼食会

1月14日に、カロリンスカ医科大学 Anders Hamsten学長と在スウェーデン日本国大使館 森元誠二特命全権大使との昼食会が開かれ、ストックホルムセンターも参加した。

昼食会では現在までに築かれてきたスウェーデンと日本との学術・教育の交流の基盤をより発展させていきたいという主旨のもと話が交わされ、Hamsten学長からはカロリンスカ医科大学と大阪大学との交流について説明があり、森元大使からは今後の可能性として、東京大学とカロリンスカ医科大学との交流について提案がされた。

昼食会の後にはInternational Relation Unit から、同大学の様々な活動について説明を受けた。Lotta Lundqvist氏から大学の創立の歴史から現在の組織概要について、学内のScientific coordinator for Japanである金子明教授から同大の研究環境について、Executive and Professional Education Ylva Olsson氏から学内の教育プログラムについてのプレゼンテーションがあった。



ストックホルムの「世界一長い美術館」



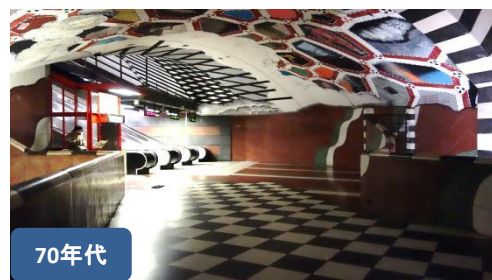
ストックホルムの地下鉄は1950年に運行を開始し、現在、東西南北に赤・青・緑の3線が走り、全てがセントラル駅で交わっています。100ある駅のうち90の駅に150名を越えるアーティストによる彫刻やペイントが施され、アーティスティックな空間を目の当たりにすることができます。全長110キロにも及ぶこれらの地下鉄は「世界一長い美術館」として人々の生活に溶け込んでおり、作成された年代により個性ある各駅には時代を超えたアートな空間が作り上げられています。



1950年に緑線が開通。バスルームと同様のタイルを用いた「バスルームアーキテクチャー」と呼ばれるスタイルが特徴。まだ地下を深く掘る技術が成熟しておらず、プラットフォームが地上に出ている駅もある。



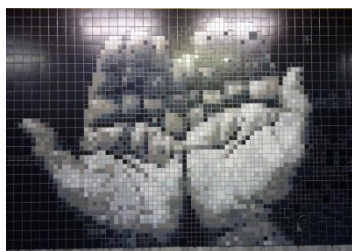
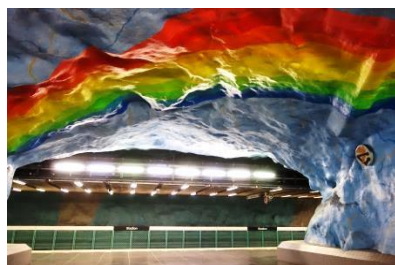
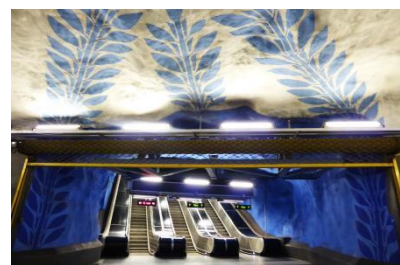
1964年に赤線が開通。アースカラーを基調としたタイルを使用している駅が多く、赤線上の駅にこの特徴が見られる。地下を掘る技術も向上し、多くの駅のプラットフォームが地下に設置された。



1975年に青線が開通。今日においてストックホルムの地下鉄の特徴として世界的に有名となった岩盤をくり抜き洞窟のようにし、その岩壁にアートを施したスタイルが特徴。青線の駅にこのスタイルが多く見られる。



80年から90年代にかけて、7の新しい駅が誕生し、これら全ては「洞窟スタイル」であった。2000年以降は新しい駅の建設されておらず、快適なエントランスや新しいタイルなど、古い駅のリノベーションが行われている。さらにプラットフォームのみならず、チケットホールや階段の装飾、彫刻やテンポラリーコーナーの設置など、ストックホルムの地下鉄アートは今でも進化を続けている。



2013年ノーベルウィーク

スウェーデンの科学者アルフレッド・ノーベルの命日である12月10日に、毎年ノーベル賞の授賞式が行われる。授賞式があるこの日を含む1週間は「ノーベルウィーク」と呼ばれ、受賞講演者や晩餐会といった様々な行事がノーベル財団によって催される。以下、2013年のスケジュールと行事内容を紹介する。

12月7日

13時よりカロリンスカ医科大学にて医学・生理学賞、17時半よりSwedish Academyにて文学賞のノーベルレクチャーがそれぞれ行われた。

カロリンスカ医科大学でのレクチャーは昨年完成された1,000名収容可能な“Aula Medica”の講堂にて行われたが、学内の学生などが多く聴講に訪れたため、立ったまま聴講する姿も多く見受けられるほどの盛況ぶりだった。

文学賞を受賞したAlice Munro氏はストックホルムを訪れてのレクチャーは叶わなかったが、代わりに事前に録画されたレクチャーが放映された。



12月8日

9時よりストックホルム大学にて物理学賞、化学、経済学賞のノーベルレクチャーが行われた。また19時からはコンサートホールにてノーベルコンサートが開催された。

ノーベルレクチャーは日曜日の朝という日程にもかかわらず開始前から長蛇の列ができ、盛況となった。

夜のコンサートはイタリア人指揮者Riccardo Muti氏が指揮を振った。参加者達は素晴らしい指揮とロイヤル・ストックホルム・フィルハーモニー管弦楽団の演奏を堪能した。



12月9日

終日、ヨーテボリにてノーベルウィークダイアログが開催された。“Exploring the Future of Energy”というタイトルの下、36名のパネリストが集まり、経済・環境といった様々な視点からエネルギー問題について講演、パネルディスカッションを行った。

当日の様子はオンデマンドでライブ中継され、80カ国もの人々がアクセスした。



12月10日

ノーベルWEEKの本番である10日は、16時よりコンサートホールにてノーベル賞授賞式、19時より市庁舎にてノーベル晩餐会が開催された。

授賞式及び晩餐会はテレビ中継され、受賞者へのメダル授与の様子や、華やかな晩餐会、ノーベルディナー、参加者たちのドレスを見ることができた。



東京大学 十倉好紀教授への ウプサラ大学名誉博士号授与式開催

1月24日、東京大学大学院工学系研究科 十倉 好紀教授へのウプサラ大学名誉博士号授与式がウプサラ大学 Grand Auditorium にて開催された。今回の授与は、十倉教授が過去30年間の論文被引用回数が最も多い物理学者の一人であること、そして高温超伝導や強相関電子に代表される物理・化学・物性物理学分野の発展に貢献したことが評価された結果である。

併せて、十倉教授は昨年12月11日にはスウェーデン王立科学アカデミー（KVA）の外国人会員にも選出されている。

授与式当日の夜には16世紀半ばに建造された由緒あるウプサラ城にて晩餐会が開かれ、名誉博士号授与者の他、新たな博士号授与者および関係者700名程度が集まった。

Uppsala University HP

[http://www.uu.se/en/news/news-](http://www.uu.se/en/news/news-document/?id=2833&area=2,12,16&typ=artikel&na=&lang=en)

[document/?id=2833&area=2,12,16&typ=artikel&na=&lang=en](http://www.uu.se/en/news/news-document/?id=2833&area=2,12,16&typ=artikel&na=&lang=en)

KVA HP

[http://www.kva.se/en/News/News-2013/Tree-new-members-](http://www.kva.se/en/News/News-2013/Tree-new-members-elected-to-the-Academy/)
[elected-to-the-Academy/](http://www.kva.se/en/News/News-2013/Tree-new-members-elected-to-the-Academy/)

ルンド大学入学希望外国人学生数国内最多

1月下旬、ルンド大学マスターコース2014年秋入学への外国人学生の申請数が国内最多となったことが発表された。申請数はおおよそ13,100件となり、外国人学生からの国内大学への申請全体の1/3を占めた。

申請数が最も多かったコースは以下の4つである。

- Master's in International Marketing and Brand Management
- Master's in International Development and Management
- Master's in Public Health
- Master's in Management

関係HP

http://www.lunduniversity.lu.se/o.o.i.s?id=24890&news_item=6123

EuroScience Open Forum 2014開催

6月21日から26日まで、コペンハーゲンにて「EuroScience Open Forum 2014」がThe Danish Ministry for Science, Innovation and Higher EducationとEuroScienceの共催の元開催されることとなった。

「EuroScience Open Forum」は科学一般に関する欧州最大の会合で、2年ごとに欧州の主要都市で開催されており、前回は2012年にアイルランドダブリンにて開催されている。

開催時、コペンハーゲンには4,500名程度が集まることが予想されており、「科学のオリンピック」として注目が集まっている。

EuroScience Open Forum 2014 HP

<http://esof2014.org/>

リサーチカウンスル2014年助成金発表

The Swedish Research Councilの2014年主な助成金一覧の発表があった。

The Swedish Research Councilは、スウェーデン国内最大のファンディングエージェンシーで、科研費を配分している日本学術振興会と類似団体である。

助成金には、一般的な科研費のほか、国際会議経費、国際交流経費、ポストクの海外派遣プログラム、教授招へいプログラムなどがある。

また、今後も状況に応じて順次追加のアナウンスメントがなされる予定である。

The Swedish Research Council HP

<http://www.vr.se/inenglish/researchfunding/ourgrants2014.4.44482f6612355bb5ee780002186.html>

Hokkaido University-Finnish Universities Joint Symposium開催

2014年秋、フィンランド University of Lapland、Universities of Oulu、北海道大学共催の下、「Hokkaido University-Finnish Universities Joint Symposium」がUniversity of Laplandにて開催されることが発表された。これは共催大学が参加している北極圏周囲に位置する国々の大学などが形成するUniversity of Arcticという学術ネットワークを活用した企画となっている。

同シンポジウムは昨年10月31日には北海道大学にて開催されており、今秋の開催で6回目の開催となる。

関係HP

<http://www.uarctic.org/Frontpage.aspx?m=3>

クラウドシステムの構築と教育への導入

1月29日、フィンランド The Ministry of Education and Culture とエストニア The Ministry of Education and Researchがエストニアの首都タリンにて二国間でのクラウドシステムの構築とその教育への導入についてのMOUを締結した。

構築されたシステム導入により、学生がよりITを用いた環境に慣れ、情報の整った環境でより自主学習が促進されることが期待されている。開発に伴い、両国ではまず教育関係者間のワークショップが行われる予定である。

フィンランド The Ministry of Education and Culture HP

http://www.minedu.fi/OPM/Tiedotteet/2014/01/koulutuspilvi_mom.html?lang=en

“KI Bladet” ~2013 NO.4~

前回のニュースレターに引き続き、カロリンスカ医科大学にて発行されている
“KI Bladet”というスタッフ誌の内容の一部をご紹介します。

学長Hamsten博士「大学の独自戦略、意思決定」

政府が今後、国内大学のより自由な意思決定の促す方針を打ち出していることについて、Hamsten学長はカロリンスカ医科大学がより国際的競争力をのばすことにも繋がるとの見解を示している。

一方、同大学が目指すべきは完全なる政府からの独立ではなく、あくまで現在の政府との繋がりを保ったままでこの方針を進めることであると語った。既に学内では大学独自の見解により、戦略的な事柄が決定されており、その一つの例として、学内のBoard of Researchが研究者の人事採用に携わることとなった件についてあげている。

Board of Researchは採用に携わることにより、より国際的に特出した研究者を学内に呼ぶこと、そして女性研究者の雇用率を上げることに積極的に取り組んでいる。

Hamsten学長はThe Swedish Research Councilが一部の研究資金の大幅な削減を行っている中、大学などもこの様な経費削減に研究環境やプレゼンスが左右されぬよう、しっかりとした方針と信念持たなくてはならないと話している。

採用・雇用に関する新方針

Board of Researchは女性と若手研究者の雇用に関して、新たに以下の4つの方針を打ち出した。

- 女性教授を雇用したDepartmentに特別な手当(ボーナス)を支給する
- 優秀な若手研究者をDepartmentにとどめるための資金援助を行う
- 特別に著名な賞を受賞した若手研究者をDepartmentで雇用するためのサポートを行う
- 国際的な業績のある若手研究者への資金援助を行う

女性教授はカロリンスカ医科大学において、その数が全体の20%にしか満たず、2015年までに47%にまで向上させることが大学としての目標である。Board of Researchの取り組みにより2300万スウェーデンクローナ(およそ3億6700万円)が女性教授、もしくは女性の客員教授雇用のためのサポートに使用されている。同時に、Board of Researchは優秀な若手研究者の雇用を促進し、より優秀な人材が集まるように働きかけている。

それぞれの方針の継続、改善は今後の実績を元に検討される。

2014年春 学内募集助成金等一覧

学内で2014年春以降に募集される助成金等の一覧が発表された。詳細は以下のURLにて確認することができる。

カロリンスカ医科大学HP

<https://internwebben.ki.se/en/karolinska-institutet-foundations-and-funds>

ノーベル賞関連イベント

カロリンスカ医科大学は12月7日にノーベル医学・生理学賞受賞者であるJames Rothman博士, Andy Schekman博士 and Thomas Südhof博士のノーベルレクチャーを開催した。今回の受賞内容は細胞小器官の小胞がタンパク質などを輸送する仕組みの発見であり、この仕組みに障害を持つことは、神経疾患、糖尿病、免疫疾患など様々な疾患へと繋がるとされる。学内には今回の受賞内容に関連した研究プロジェクトがいくつか存在しており、講演には高い関心が寄せられた。

また12月10日には学内の学生組織であるMedical Student Unionがノーベル賞授賞式と晩餐会の後のアフターパーティーを企画し、ノーベル賞受賞者、晩餐会のゲスト、学生ら1200名程度が集まった。

SciLifeLabの新しいプラットフォーム

政府からの資金をもとに、新しくプロテオミクス、バイオイメージング、臨床診断学、ゲノム機能学の4つのプラットフォームがSciLifeLabに設置されることとなった。各プラットフォームの研究者は、今後SciLifeLabどのような技術、装置が必要かを検討、そして開発する。他の研究者たちは自分の研究について彼らに意見を求め、彼らが開発した装置を使用することができるようになる。

今回の新しい設置について、2月にSciLifeLabのScientific Directorに任命されたKarin Dahlman-Wright博士は「プラットフォームから発信された情報が研究を促進し、よりよい成果が生まれることを望んでいる。」とコメントを寄せた。

現在、プラットフォームを構成する研究者をどのように選出するかについての話し合いが進んでいるが、実際の決定まではまだ時間がかかる見通しである。

2013年助成金受領額最多

The Swedish Research Councilは、Medicine and Healthの分野で同組織の2013年の助成金、全9億6600万スウェーデンクローナ(およそ154億円)の内、カロリンスカ医科大学が4億4400万スウェーデンクローナ(およそ71億円)を受領し、受領額最多組織であったことを発表した。

新学生・研究者寮の設置計画

カロリンスカ医科大学ソルナキャンパスに学生や研究者400名を収容できる寮を設置する計画があるとの発表があった。実現すれば2014年秋に着工、2015年夏頃完成となる。

“KI Bladet”HP(一部英語)

<https://internwebben.ki.se/en/ki-bladet>

Gathering for returnees from Japanの開催

フィンランド同窓会と在フィンランド日本国大使館とで同窓会員同士の懇親を深める合同会合を開催することとなりました。詳細は以下の通りです。

日 時：2014年3月27日(木)

会 場：Restaurant Tokyo55, Runeberginkatu 55, 00260 Helsinki Finland

セミナー・シンポジウムの開催

セミナー・シンポジウムの開催について随時ホームページでお知らせしておりますので、ストックホルムセンターホームページをご覧ください。

最新のインフォメーションをご希望の方はこちらからご登録ください。

<http://www.jsps-sto.com/contact.aspx>

外国人特別研究員事業(欧米短期&一般)

外国人特別研究員事業（欧米短期&一般）（JSPS Postdoctoral Fellowship Program (short-term & standard)）は、諸外国の若手研究者に対し、我が国の大学等において日本側受入研究者の指導のもとに共同して研究に従事する機会を提供する事業です。

●現地からの推薦は締め切りましたが、引き続き2014年度に日本での研究を希望する者は本部へ申請することが可能です。

<http://www.jsps.go.jp/english/e-fellow/index.html>

カロリンスカ医科大学同窓会 会員募集

KIでは過去、現在問わず、カロリンスカに在籍されていた方々のためにKI Alumni & Friendsを設立し、様々なイベントの企画、メールマガジンによる情報提供、を行っています。KIにいらした事のある方でご関心がある場合には是非以下ホームページをご覧ください。

<https://www.network.alumni.ki.se/portal/public/Default.aspx>

JSPS Stockholm News Letterの定期購読について

ニュースレターの定期購読（電子メールにて配信します）をご希望される場合は、機関名、部署、氏名及びメールアドレスを明記の上、jsps-sto@jsps-sto.com までご連絡ください。

JSPS Stockholm News Letter 第41号

作成・編集：吉澤 菜穂美 二上 佐和江

発行日：2013年3月26日

発行元：日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター

連絡先：JSPS Stockholm Office、Retzius väg 3、171-65 Solna、Sweden

Phone: +46 (0) 8 5248 4561 FAX: +46 (0) 8 31 38 86

Website: <http://www.jsps-sto.com/> E-mail: jsps-sto@jsps-sto.com

JSPS
STOCKHOLM